

中世鹿児島島の港と戦国城下町の形成

三好志尚

第一章 研究の目的と方法

第一節 問題の所在

戦国城下町の景観研究は文献史学や考古学、建築史学、歴史地理学から学際的に進められている^①。この中では、中世の守護所から戦国期、織豊期を経て近世城下町まで、城下町の変化のプロセスに着目し、政治、軍事、経済等の様々な文脈と結び付けながら、城下町の成立や在り方を明らかにしようとしている。このような研究において戦国城下町は城郭や家臣屋敷、町場、寺社等が散在する多元的な構造であり、地域の「個性」を反映した多様な景観だったと捉えられている^②。そして多様性の要因として、地域の権力構造や社会構造だけでなく、集落の形態等その地域に既存の空間構造も挙げられている^③。

近年、既存の空間構造として港の存在が注目されている。特に

北陸から山陰の港町に関しては学際的な研究がまとめられ、城下町の研究に先鞭をつけたものとして評価できる。この中で仁木は北陸の諸事例を総括し、北陸の中世港町は様々な宗派の寺社勢力がそれぞれの傾向を持って立地する「モザイク状に入り組んだ総体」だったとした。そして武家権力は中世港町に対して、港へのアクセス路の掌握や御用商人を介した緩やかな支配を行うに止まり、景観の変化を伴う直接的な介入には至らなかったとした。しかし守護所の選定に港の存在が重視された阿波の勝瑞では、武家権力が港の移転に伴って港に近い低湿地の都市整備を行った可能性が指摘された^⑦。つまり仁木の研究は、中世から流通が盛んで、港町が先進的に発達していた北陸の地域性を反映したものであり、一般化はできない。従って戦国期の港と城下町の間関係を考察するには、北陸の事例を相対化する必要がある、他地域におけるさらなる事例の蓄積が求められる。

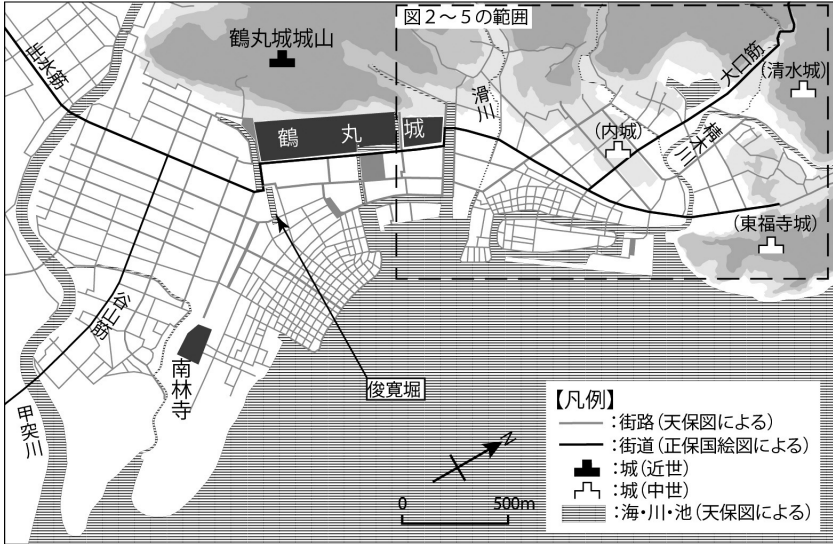


図1 中世島津氏の拠点の立地と近世鶴丸城下町の関係

そこで本稿では鹿児島を扱う。対象地選定の主な理由は次の二点である。まず中世の早い段階から守護島津氏が拠点にして城下町を形成したことである。鹿児島における島津氏の拠点は、南北朝期の東福寺城、室町期の清水城、戦国期の内城、近世の鶴丸城と変遷した。これらの城館は図1の近世鶴丸城下町に重ねると、全て内城を中心に半径一・五キロメートル程にあり、近世城下町の一部と重なる狭い範囲で移転していたと分かる。従って鹿児島は城下町の変化を通時的に把握できる地域である。

二点目は中世史料から複数の港の存在を確認できることである。これらの港を位置比定すると、城下町全体の中で港を捉えることができる。さらに島津氏は、硫黄の供給を担う等、遣明船貿易に関与しており、また鹿児島には琉球船が着いたとされ、キリスト教宣教師も滞在した^⑩。従って鹿児島港には対外交渉機能もあったと想定され、対外交渉港と城下町の間関係という新たな事例を期待できる。

第二節 景観復原の方法と史料

本稿で採用する景観復原は、景観を構成する諸要素の存在時期、立地、敷地等を史料から抽出し、精密に地図上に表して統合するという歴史地理学のオーソドックスな手法である。歴史地理学に

おける中世都市の景観復原研究は主に中世城下町を対象として進められてきた。中世から近世への城下町の変容過程を類型化した矢守は、近世絵図の描写を実態として復原したが、中世は同時代の都市図がわずかしか存在しない上に、実態と絵図の描写が乖離しているという指摘もある。一次史料に立脚した景観復原としては、松本と小林による研究が挙げられる。松本は『長宗我部地検帳』を用いて土佐における中世城下町の武家屋敷と市屋敷の配列を模式的に表したが、具体的な地図化には至らなかった。一方で小林は『長宗我部地検帳』に加えて地籍図を補助的に使うことで、現実の地形図上に城下町の景観を復原した。しかしこのような一次史料に基づく復原は史料的制約が大きく、土佐以外の地域では適用できないという問題があった。

そこで現在の歴史地理学では、一次史料に加えて発掘調査や近世以降の二次史料を用いる手法が主流になっている。中でも地籍図は近代史料であるため、中世の地割を詳細に復原できるわけではないが、地籍図の地割をパターン化することで空間形成の時期差や特徴を推定でき、景観を面的かつ動態的に復原することができる¹⁷。松本と小林の研究では復原の対象が城館、武家屋敷、町場道、河川等のさらに多様な構成要素を捉えることで城下町全体の

景観を復原し、その変化のプロセスを追うことが可能になる。

鹿児島も中世の景観復原に使用できる中世史料は限られ、さらに発掘調査成果もほとんどない。よって景観復原のためには近世・近代の文献史料や絵図・地図史料に多くを求めざるを得ない。山村は、鎌倉、山口等を対象に多様な構成要素の立地パターンや形態を精緻に復原し、その変化のプロセスに着目することで、中世都市の空間構造を明らかにした。従って鹿児島においても、現在の歴史地理学の景観復原手法を適用することで空間構造の分析は可能だろう。

加えて、中世港町の景観復原研究も先行研究として重要である。歴史地理学では南出が古代中世の港の空間構成を検討したが、ここでは港湾施設のみを復原しており、都市空間は対象にされない。一方で建築史学の宮本は、先述の歴史地理学の復原手法を港町に導入し、地籍図を基に町、街路、水際線、寺社を復原することで、中世から近世への都市空間の変化を分析した。しかし宮本は、景観の変化のプロセスを分析していない点で課題を残している。多様な主体が絶えず集まる都市であるという点からも、港町の空間構造を明らかにする上で、動態的な景観復原が必要だと言える。さらに宮本は景観要素として地形を考慮しなかったが、港町は必ず不安定な地形に立地するため、旧地形の把握が重要であると指

摘されている²²⁾。そこで本稿では、前提となる中世の地形を復原した上で、城館、町、寺社、街路、街道を構成要素に設定して景観の変化を追うことにする。

鹿児島の中世史料は、島津氏に関する文書や記録が包括的にまとめられた『旧記雑録』に多く所収される他、『山田聖采日記』、『樺山玄佐日記』、『上井覚兼日記』等も使用できる²³⁾。近代史料は豊富であり、特に『麿藩名勝考』や『薩藩名勝志』、『三国名勝図会』といった地誌は寺社や古城等の沿革に詳しい²⁴⁾。また『島津国史』や『西藩野史』等の歴史書にも寺社の創建年等の記載があり、参考になる²⁵⁾。

中世鹿児島の絵図・地図史料は残っておらず、正確性の観点から近世初期の図も使用できない²⁶⁾。そこで幕末の図ではあるが、天保一三年（一八四二）頃の「鹿兒島絵図」と安政六年（一八五九）藩庁作成の「旧薩藩御城下絵図」、天保年中（一八三〇―四四）の屏風図「鹿兒島城下絵図」を用いた²⁷⁾。本稿ではそれぞれ天保図、安政図、天保屏風図と略し、三点を近世図と総称する。天保図と安政図は内容が詳細であるため、実態を正確に表していると考えられ²⁸⁾、近世の文献史料を用いた復原の前提として有用だと考える。天保屏風図は寺社の配置が正確である他、地名の記載が多い。また町の地割の復原には明治期の地籍図を使用した²⁹⁾。

以上の方法と史料から、二章で旧地形の復原と港の位置比定を行い、三章で諸要素の立地傾向や形態と港の関係の変化を追う。そして四章で鹿児島港と城下町の関係をまとめる。

- ① a 内堀信雄・鈴木正貴・三宅唯美編『守護所と戦国城下町』高志書院、二〇〇六年。b 新・清須会議実行委員会編『守護所シンポジウム2@清須 新・清須会議 資料集』二〇一四年。c 『城下町科研』事務局編『城下町科研』総括シンポジウムⅠ 資料集 中世・近世移行期における守護所城下町の総合的研究』二〇一七年。d 同『城下町科研』総括シンポジウムⅡ 資料集 中世・近世移行期における守護所城下町の総合的研究』二〇一七年。

- ② a 仁木宏『空間・公・共同体』青木書店、一九九七年。b 同『室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町』（前掲①）a 四七一―四九五頁。

- ③ 山村亜希『中世都市の空間とその研究視角』史林八九一―二〇〇六年、七五―一〇八頁。

- ④ 仁木宏・綿貫友子編『中世日本の流通と港町』清文堂、二〇一五年。

- ⑤ 仁木宏『中世港町における寺社・武家・町人——北陸を中心に——』（前掲④）、七一―二頁。

- ⑥ 福家清司『勝瑞津と聖記寺の創建』（石井伸夫・仁木宏編『守護所・戦国城下町の構造と社会——阿波国勝瑞——』思文閣出版、二〇一七年）、一九三―二四頁。

- ⑦ 山村亜希『室町・戦国期における勝瑞の立地と形態』（前掲⑥）、一二六―一四六頁。

- ⑧ 鹿児島県『鹿児島県史 第一巻』一九三九年、五七五―五九五頁。

- ⑨ 「鳥津義久譜」(鹿兒島県維新史料編さん所編『鹿兒島県史料 旧記雑録後編一』鹿兒島県、一九八一年、史料番号七九四)。
 ⑩ フロイス日本史(松田毅一・川崎桃太訳「完訳フロイス日本史⑥」ザビエルの来日と初期の布教活動——大友宗麟編一)中央公論新社、二〇〇〇年、三四—四〇頁。
 ⑪ 矢守一彦「都市プランの研究」大明堂、一九七〇年。
 ⑫ 山村亜希「南北朝期長門国府の構造とその認識」人文地理五二・三、二〇〇〇年、二一七—二二七頁。
 ⑬ 松本豊寿「城下町の歴史地理学的研究」吉川弘文館、一九六七年。
 ⑭ 小林健太郎「戦国城下町の研究」大明堂、一九八五年。
 ⑮ 前掲③。
 ⑯ 藤田裕嗣「市庭と都市のあいだ」(中世都市研究会編『都市空間』新人物往来社、一九九四年)一五〇—一六九頁。同「日本中世における市庭と広場」国立歴史民俗博物館研究報告六七、一九九六年、一五九—一七五頁。同「戦国城下町の復原史料としての地籍図——小林健太郎氏の再評価をめぐって——」(千田嘉博・矢田俊文編『能登七尾城・加賀金沢城——中世の城・まち・むら——』新人物往来社、二〇〇六年)一一三—一三六頁。
 ⑰ 山村亜希「中世都市の景観復原と地籍図」愛知県立大学文学部論集(日本文化学科編)五四、二〇〇六年、一—二四頁。
 ⑱ 山村亜希「中世都市の空間構造」吉川弘文館、二〇〇九年。
 ⑲ 南出真助「日本古代中世における港の空間構成」追手門学院大学文学部アジア文化学科年報一、一九九八年、一三九—一五四頁。同「港湾空間におけるポトルネック構造——水と陸の景観史試論」(金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、二〇一八年)一五一—一七八頁。
 ⑳ 宮本雅明「日本海域港町の空間形成」(長谷川成一・千田嘉博編

『日本海域歴史大系』第四卷近世篇Ⅰ、清文堂出版、二〇〇五年)三一—三四五頁。同「都市空間の近世研究」中央公論美術出版、二〇〇五年。同「日本型港町の成立と交易」(歴史学研究会編『港町のトポグラフィ』青木書店、二〇〇六年)七九—一一〇頁。

㉑ 前掲⑤。

㉒ 山村亜希「室町・戦国期における港町の景観と微地形——北陸の港町を事例として——」(前掲④)二五五—二八六頁。

㉓ 『旧記雑録』は、鹿兒島藩の史学者伊地知季安・季通父子が弘化年間(一八四四—四八)から鳥津家文書や藩内の寺社旧家等の文書・記録を集め、編年順に集成了した、鳥津氏関係史料集である(五味克夫「福島正治と伊地知季通——『旧記雑録』補考——」(鹿兒島県歴史資料センター黎明館『旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集七』月報、二〇〇七年)一—七頁)。刊本は次の通り。a 鹿兒島県維新史料編さん所編『鹿兒島県史料 旧記雑録前編一』鹿兒島県、一九七九年。b 同『鹿兒島県史料 旧記雑録前編二』同、一九八〇年。c 前掲⑨。d 同『鹿兒島県史料 旧記雑録後編三』同、一九八三年。以下ではa、b、c、dを「旧前一」、「旧前二」、「旧後二」と略し、刊本の史料番号を付ける。e 鹿兒島県史料刊行委員会編『薩摩阿多郡史料 山田聖栄自記』、一九六七年。f 『榊山玄佐自記』は「旧前一」、「旧後一」に分割収載されている。g 東京大学史料編纂所『大日本古記録 上井覚兼日記 上』岩波書店、一九五四年。h 同『大日本古記録 上井覚兼日記 中』同、一九五五年。i 同『大日本古記録 上井覚兼日記 下』同、一九五七年。

㉔ 藩による地誌編纂のための本格的な調査は天明・寛政年間(一七八一—一八〇一)に始まり、諸郷からの報告書を基に文化三年(一八〇六)に『薩藩名勝志』が作成された。その後の再調査で『薩藩名勝志』の不備や誤謬が補充訂正されたものが、天保一四年(一八四三)

成立の『三國名勝図会』であり、鹿兒島藩地誌編纂の集大成とされる。寛政七年（一七九五）成立の『鹿藩名勝考』は、島津重豪の命を受けた国学者白尾国柱が主に神社や神陵の由来・伝承をまとめたものである。（原口泉「総説 近世地誌における庄内地理志の位置」『都城市史編さん委員会』『都城市史 史料編 近世Ⅰ』都城市、二〇〇一年）九一―二〇頁）刊本は次の通り。a 鹿兒島県維新史料編さん所編『鹿兒島県史料 鹿藩名勝考』鹿兒島県、一九八二年。b 鹿兒島県史料刊行委員会編『鹿兒島県史料集第四十二集 鹿藩名勝志（その二）』鹿兒島県立図書館、二〇〇三年。c 原口虎雄監修『三國名勝図会』青潮社、一九八二年。

②⑤ 享和二年（一八〇二）成立の『島津国史』は、島津家の位置づけを明確にするため、鹿兒島藩が主に「新編島津氏世祿正統系図」を基に編纂した編年体の史書である（林匡「重豪と修史事業」〔鈴木彰・林匡「島津重豪と薩摩の学問・文化」勉誠出版、二〇一五年〕七―二〇頁）。「新編島津氏世祿正統系図」は幕府への承図提出を契機に正保二年（一六四五）から中世以来の文献の調査を基に作成された島津家の家譜であり、『旧記雜録』に多くの記事が収められている（五味克夫「解題」〔前掲注②〕a 二一―一〇頁。宝暦八年（一七五八）成立の『西藩野史』は民間による史書であり、閲覧可能な限りの文献と聞き取り調査を基に著された（林匡「薩摩藩記録奉行得能氏について」鹿兒島史学五〇、二〇〇五年、一―三八頁）。刊本は次の通り。a 島津家編集所編『新刊島津国史』一九〇五年。b 薩藩叢書刊行会『西藩野史』一九〇一年。

②⑥ 寛文二〇一年（一六七〇）頃の「鹿兒島城下町割図」（鹿兒島県立図書館蔵）が唯一の近世初期の図である。幕末の図と比較すると全体の構成は概ね対応するが、細部では街路が直線・直交に単純化されて描かれ、対応しない。この図は近世初期に鹿兒島と藩内の主な支城の城

下町を統一的に描いたものの中の一つである。これらの図の街路は共通して観念的に描かれ、実態には忠実ではないとされる（揚村固「江戸期の外城下絵図」鹿兒島県立短期大学紀要（自然科学篇）五二、二〇〇一年、一三一―二七頁）。

②⑦ それぞれの所取は次の通り。a 鹿兒島市編『薩藩沿革地図』鹿兒島市教育委員会、一九三五年。b 鹿兒島県立図書館編『旧薩藩御城下絵図』鹿兒島県立図書館、二〇〇一年。c 『鹿兒島城下絵図』大江出版社、一九八〇年。天保図、安政図の時期比定はd 五味克夫「旧薩藩御城下絵図」解題（前掲b）五六一―六〇頁による。

②⑧ 天保図は、寺社や橋、山川等の表現が写実的で、それらの立地は同時期の『三國名勝図会』の記述と一致する。街路も天保屏風図や現状と一致する部分が多く、さらに道幅も細かく描き分けられている。安政図は、画法や記載内容が天保図と近似しているが（前掲②⑦d）、町人地の寺社も示されている等、わずかに違いもあるため併せて使用した。

②⑨ 『旧土地台帳・同附属地図（明治二三年運用開始）』（鹿兒島地方事務局保管）。本稿では地籍図と表す。

第二章 旧地形と港の復原

第一節 旧地形の復原

鹿兒島は標高四〇メートル以上あるシラス台地の丘陵が海に迫り、全体として丘陵と海岸の間の平地が狭い（図2）。また一〇メートル程の緩やかな舌状台地が二列ある。楠木（あべき）川は丘陵や舌状台地によって曲がり、河口で東福寺城の丘陵と舌状台



図2 近世の景観から復原する中世の地形と港の立地

本稿では天保屏風図にある地名を便宜的に用いており、図2～6では〈 〉を付けて明示した。

地①に挟まれて川沿いの低地が狭まる。よって精木川は内陸で滯水しやすかったと考えられ、河口から舌状台地②周辺までラグーンだったと推定できる。近世には精木川河口に干潟が広がっていたとされ、新築地建設以前には潮時を見て祇園神社の脇に大船を引き入れていたという。③従って精木川による堆積が激しかったことが窺え、ラグーンも堆積によって埋まっていったのだろう。近世図で舌状台地②の北に池があり、ラグーンの名残だと考えられる。

鶴丸城建設以前の海岸線は行屋通であり、行屋通より海側の陸地は近世に徐々に埋め立てられたものだという。④行屋通（図2）は緩やかな曲線で、この道を境に陸側と海側で街路パターンが明らかに異なるため、中世の海岸線だったことは間違いないだろう。従って本稿では行屋通を中世の海岸線として復原し、この道より海側の地形は考慮しない。なお行屋通以外の海岸線の復原には、四メートル等高線が行屋通と概ね重なるため、目安として用いた。

第二節 港の立地

「貴久記」によると大永七年（一五二七）に鹿児島島の「戸柱」に船が着き、同年に「田之浦」から船が出たとされる。「田浦」は天文四年（一五三五）にも船着場として使用されたという。ま

た『樺山玄佐自記』^⑦から「ぬめり川」に天文七年（一五三八）に船が入ったことが確認できる。従って「戸柱」、「田之浦」、「ぬめり川」が中世の港として考えられる。

戸柱は中世から精木川河口（図2）を指したとされる^⑧。先述した精木川河口に推定できるラグーンが船着場として機能したのでろう。また田之浦は、戸柱から東福寺城の東側にかけての沿岸を指し、鶴丸城建設以前は特に東福寺城跡の西南が広い港湾だったという^⑨。東福寺城の東側が急斜面で海に落ちることからも、田之浦も港として機能していたのは精木川河口付近であり、戸柱とは異なる範囲だったのだろう。

「ぬめり川」は舌状台地^①の南西の滑川を指すと考えられる。滑川河口の地形は窪んでおり、中世には入江だったと分かる。また近世図では滑川の南に太い堀があり、岩崎の谷から水が流れ込んでいる。この堀は、具体的な建設時期は不明だが、鶴丸城の一部である厩の北面を画しており、鶴丸城建設に伴うものだと考えよう。この堀が既存の自然地形を利用して築かれたとすると、中世には堀の位置に岩崎からの川筋が存在した可能性が高い。この旧河道の河口も滑川と同様に入江だったとすると、滑川と併せて港として機能した可能性がある。

以上のように中世の港として精木川河口の戸柱と、岩崎の旧河

道も含めた滑川周辺を推定できる。以下、これら二か所の港を「戸柱の港」、「滑川周辺の港」と表記することにする。

① 本稿の標高はすべて昭和三十八年測量の都市計画図による。

② 『薩藩名勝志』（前掲一章24b）一五頁。

③ 『薩陽落穂集』（薩藩叢書刊行会『薩藩叢書 第三編』一九〇八年）六一頁。この史料は、伊集院兼喜が藩に関して見聞きしたことを記し明和八年（一七七二）成立したもので、城下町に関する記述も含まれる。また、新築地は元禄一四年（一七〇一）に幕府から建設を許可されたことされる（『新刊島津国史』（前掲一章25a）九卷、一四一―一五頁）。

④ 『倭文麻環』（山本盛秀編『倭文麻環』上之巻、青史社、一九七四年）三七三―三七六頁。文化九年（一八一二）成立。藩の命を受けた白尾国柱が、藩主教育の書として領国内の風俗・習慣・伝承・出来事等をまとめたもの（伊牟田經久『倭文麻環』の世界』南方新社、二〇一〇年、二一五―二二〇頁）。

⑤ 『旧前二』二〇七八、二〇九一。「貴久記」は寛永一〇年（一六三三）までに成立した編纂史料である（新名一仁『島津貴久戦国大名島津氏の誕生』戎光祥出版、二〇一七年、四七―五〇頁）。

⑥ 『島津日新譜』（『旧前二』二二三三）。「島津氏家譜」（『旧前二』二二四〇）。

⑦ 『旧前二』二二二九。

⑧ 『三国名勝図会』（前掲一章24c、第一巻）一五四頁。

⑨ 『三国名勝図会』（前掲一章24c、第一巻）八三頁。

⑩ 滑川河口の地形は堀のように見えるが、中世に堀の存在は史料上確認できない。この地形が人工的に見えるのは滑川右岸の等高線が直線であるためだろう。天保図では滑川右岸に複数の大型屋敷があり、

その中の一つの琉球館は元禄九年（一六九六）年頃に置かれたとされる（深瀬公一郎「近世日琉関係における鹿兒島琉球館」早稲田大学大学院文学研究科紀要、第四分冊四八、二〇〇二年、四五―五六頁）。つまりこの地形は近世の屋敷建設に伴う整備の結果だと考えられる。

第三章 城館・寺社・町の立地

第一節 景観復原の時期区分

本章では城下町を構成する城館、寺社の存在と立地の根拠を表1にまとめ、時期を区切って地図化し、城下町と港の関係の変化を追う。以下、城館、寺社の存在時期、位置比定は表1に基づく。時期区分は鹿兒島における島津氏の本拠の移転を指標とした。^①島津氏は南朝方の東福寺城を暦応四年（一三四一）に攻略し、間もなく拠点にした。当時、薩摩・大隅の守護だった島津氏は総州家と奥州家に分かれてそれぞれ薩摩、大隅の平定に当たっており、東福寺城に入ったのは奥州家だった。その後奥州家は鹿兒島を離れて大隅、日向に進出したが、一四世紀末に戻り、清水城を本拠とした。そして奥州家は薩摩にも支配を広げ、薩摩・大隅・日向の守護を統一した。戦国期に家督継承をめぐる抗争が生じると、庶家の相州家が家督を事実上篡奪して内城を築き、鶴丸城に移るまで本拠とした。よって時期区分は次の三期である。Ⅰ東福寺城

期は暦応四年（一三四一）から嘉慶元年（一三八七）の清水城建設まで、Ⅱ清水城期は天文一九年（一五五〇）の内城建設まで、Ⅲ内城期は慶長六年（一六〇一）の鶴丸城の普請開始までである。なお町に関しては、史料から具体的な存在と位置を推定できるのは内城期以降である。内城期の町は城下町全体の中の立地傾向だけでなく、地籍図を用いてより詳細な分析ができるため、五節で地割から町の形成と港の関係を考察する。

また街道については、中世史料がほとんどないため、近世初期の正保国絵図^③にある街道（図1）を前提として各時期の街道を推定する。近世初期の街道は東福寺城西麓から海岸に沿い、鶴丸城下町の中で出水筋と谷山筋に分岐し、また途中で北上する大口筋もあつた。^④以下では街道を示す際に近世の呼称を参考にし、便宜的に出水・谷山筋、大口筋と表す。

第二節 Ⅰ 東福寺城期（一三四一年―一三八七年）

東福寺城の丘陵は海に突き出し、麓に精木川の河口を持つ（図3）。この時期の島津氏が大隅への進出を窺っていたことを勘案すると、東福寺城は島津氏の一時的な拠点だったのだろう。^⑤従って戸柱の港が軍港として使用されていた可能性も高いと言える。寺社は東福寺城西麓に集中して立地した。慶長年中（一五九六

表1 城館・寺社の存在時期・位置比定

城館	
名称	存在が確認あるいは推定される時期、初見/位置比定/寺院の宗派【備考】
東福寺城	旧前1-2112神護清和軍忠状：廓堂4(1341)当城に籠る南朝方を島津氏が攻略。島：文和3(1354)9月以前～三：貞治2(1363)以前。島津氏久が居城/遺構：堀・土塁等。三：安養院の南隣に氏久の「治所」
長谷場城	三：応永元(1394)以前に存在/三：跡地に福昌寺が創建
清水城	三：嘉慶(1387-89)堺築城。島：嘉慶元(1387)築城/遺構：堀、土塁等。山：麓に「清水屋形」。寛：弘治2(1556)城跡に大乗院が建立
内城	三：天文19(1550)島津貞久が本拠に/三：慶長16(1611)城跡に大龍寺が創建。近世図：「大龍寺」
鶴丸城	旧後3-1440治部少輔経業日記：慶長6(1601)普請開始/近世図
神社	
池之上熊野権現社	三：正應2(1289)以前に勧請。旧後1-98島津氏老臣連誓坪付：弘治4(1558)/天保屏風園
(福ヶ迫)諏方神社	三：薩：島津忠久(-1227)が勧請/近世図【天保屏風園：「福ヶ迫諏方」。本稿は諏方神社と区別し、福ヶ迫諏方神社とする】
諏方神社	三：薩・寛：延文元(1356)島津氏久が移す。旧前1-2626島津氏久寄進状：正平1(1356)/近世図
若宮八幡宮	三：薩：延文元(1356)島津氏久が勧請。旧前2-929鹿児島郡内宮地田島并御分事：応永21(1414)/近世図
小城権現社	旧前2-1759島津忠島寄進状：明応6(1497)創建/近世図
福荷神社	三：薩：島津忠国(1403-70)が市来から迎祀。天文7(1538)再興。上：天正3(1575)/近世図。三：薩：天正中(1573-92)福荷尾(糟木川を隔てて南の丘)から移動
祇園神社	旧後1-910島津氏老臣連誓坪付：天正5(1577)「戸柱大明神」。上：天正12(1584)「祇園」/近世図
春日神社	三：享禄中(1528-32)に存在。旧後3-1440治部少輔経業日記：慶長6(1601)/近世図
多賀神社	三：薩：天正7(1579)創建。上：天正11(1583)/近世図
経見社	『儀文麻痺』：内城期に当社の下に柳町ができる/近世図
寺院	
安養院(東福寺)	三：薩：初め東福寺があり島津氏久が安養院として再営。旧前1-1250島津忠宗禁制：文保3(1319)「東福寺」。旧前2-1759島津忠島寄進状：明応6(1497)安養院/近世図/三：薩：真言宗
浄光明寺	三：薩：島津忠久が宣阿上人(-1213)を開山として創建。旧前1-851浄光明寺鐘銘：弘安7(1284)/近世図/三：薩：健治3(1277)浄土宗から時に宗
五道院(本立寺)	三：薩：島津家初代から五代の廟所あり。島：貞治2(1363)五代目の貞久の死去後に創建か/天保図・安政図：「本立寺」、「本隆寺」/三：島津忠久(1616-94)が本立寺に改名/三：薩：時宗
長福院	三：島津氏久(1328-87)の時、創建/三：諏方神社の側の弓場地。慶長中(1596-1615)坊中馬場に移動。「旧射圃記」：応永20(1413)諏方神社の山に弓場地あり。後に弓場地を示す石碑が建立。寛政8(1796)再建。天保屏風園：諏方神社の北に石碑。石碑は諏方神社境内に現存。[「旧射圃記」は石碑の銘文]/三：諏方社六坊の一つ。六坊は安養院、長福院、万寿院、善行院、西寿院、文珠院。安養院以外は慶長中(1596-1615)に大乗院の塔頭群の一部に。[大乗院、安養院、西寿院は真言宗であるため、諏方社六坊は真言宗か]
福昌寺	三：薩：応永元(1394)創建。旧前2-536島津元久寄進状：応永2(1395)/近世図。旧前2-574島津元久定書：「於福昌寺西至堺定置寺」/三：薩：曹洞宗
大徳寺	西：永正4(1507)創建。旧前2-2155空山日記：享禄2(1529)三：内城建設により浄光明寺の北東麓から和泉崎(鶴丸城城山の南端)に移動/三：薩：曹洞宗
千手堂(久世寺、千手院)	旧前2-574島津元久定書：応永3(1396)「千手堂」。三：薩：永禄6(1563)千手院として再興/三：薩：応永23(1416)内之丸観音堂の辰巳一町。薩：応永23は永江伊右衛門宅地の辺り。天保図：「永江伊右衛門」。三：薩：応永23以降、内之丸観音堂右脇に移動/三：薩：慶長中(1596-1615)大乗院十坊に「真言宗」か
内之丸観音堂	三：薩：応永23(1416)以降、千手堂が右脇に移転/近世図/不明
興国寺	三：薩：明応5(1496)または明応6創建。旧前2-1914陶弘監書状：永正16(1519)/三：薩：永正5(1508)後の鶴丸城跡の山側に移動。跡に大興寺創建。天保図・安政図：「御蔵」/三：薩：曹洞宗
大興寺	三：薩：永正5(1508)創建。旧前2-1824竜巖寺・莊嚴寺・大興寺門徒契約状：永正7(1510)/天保図・安政図/三：真言宗
光明寺	三：薩：応仁中(1467-69)再興/三：薩：慶長中(1596-1615)まで岩崎口。天保屏風園：「岩崎口」/三：薩：真言宗
桂樹院島陰寺	三：薩：寛：文明11(1479)に創建。旧前2-1567島津忠島書状：文明16(1484)三：薩・寛：鶴丸城城山の北の浜谷口、射場の地。天保屏風園：「射場」。三：海岸から長享2(1488)射場に移動。/三：薩：臨濟宗
大乗院	三：薩：天文中(1532-55)創建。上：天正2(1574)/三：薩：後の般若院の地に建立。弘治2(1556)移動。近世図/三：真言宗
宝持院	旧前2-2239禪山玄佐自記：天文4(1535)/三：後追から天正中(1573-92)移動。天保屏風園：「後追」。近世図/三：真言宗
行屋観音堂	三：天文・弘治中(1532-58)日秀上人が建立/三：行屋通。安政図/三：真言宗
万寿院	三：薩：慶長中(1596-1615)には存在/三：清水馬場東角、諏方馬場。慶長中に坊中馬場に移動/「真言宗。表中の長福院を参照」
善行院	三：薩：慶長中(1596-1615)には存在/三：諏方馬場。慶長中に坊中馬場に移動/「真言宗。表中の長福院を参照」
西寿院	三：行屋観音堂建立の後、日秀上人(-1577)が建立/三：諏方馬場。慶長中に坊中馬場に移動/三：真言宗
松本寺	三：文禄元(1592)鹿児島島に移動/三：坊中馬場。天保図・安政図/三：大乗院十坊の一つ「真言宗」
文珠院	旧後3-1191文珠院牧庵書状：慶長5(1600)/三：諏方馬場。慶長中に坊中馬場に移動/「真言宗。表中の長福院を参照」
不断光院	三：薩：永禄5(1562)創建。旧後1-597昭高院遺書状：元龜2(1571)/近世図/三：薩：浄土宗
般若院	三：大乗院の移転後。旧後3-844三輪大官良惠書状：慶長4(1599)/天保図・安政図/三：薩：真言宗

・中世史料はゴシック体で表示。

・略称の史料名・出典は以下の通り。また出典に関して、以下に示したものは本文一章②、③、④、二章④による。

旧：「旧記雑録」。刊本の編、巻、一、史料番号、史料名を付けて表示。上：「上井兼光日記」。山：「山田聖栄自記」。1967年。三：「三国名勝図会」。薩：「薩藩名勝志」。寛：「寛藩名勝志」。島：「島津国史」。西：「西藩野史」。遺構：本文注三章③。「旧射圃記」(鹿児島市史編さん委員会編「鹿児島市史Ⅲ」鹿児島市、1971年)760-761頁。

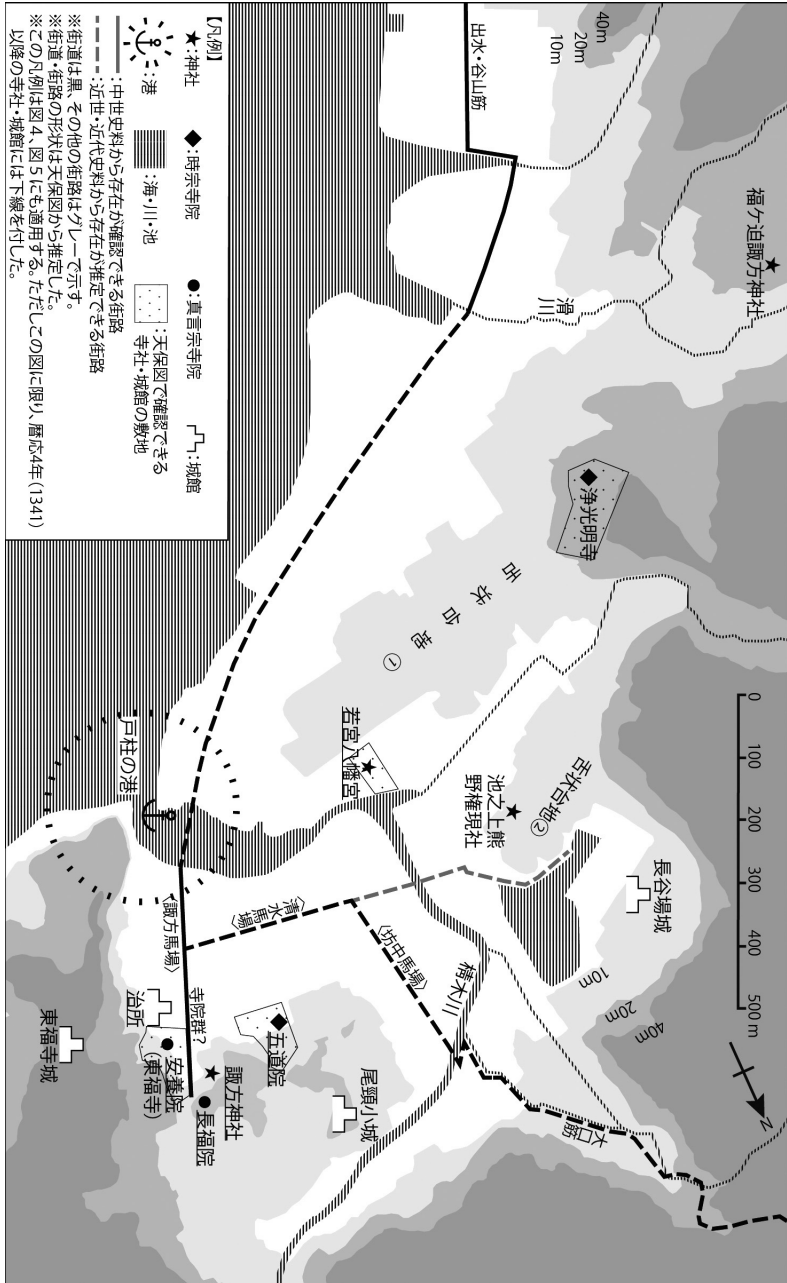


図3 東福寺城期(1341-1387年)の景観

「一六一五」には諏方神社近辺に諏方社六坊という寺院群があり、この中の多くの寺院は諏方馬場に面したという。この寺院群の内、安養院と長福院は東福寺城期に存在していたとされるため、他の寺院もこの時期から建立され始めていた可能性がある。また諏方馬場は応安三年（一三七〇）に「すわの御まへの道」として存在が確認できる^⑥。よってこの寺社群は諏方馬場を軸にして戸柱の港と結び付いていたと考えられる。なお鹿兒島では中世から近世に至るまで街路のことを馬場と呼んでいる。

街道に関しては、諏方馬場に加えて正平七年（一三五二）には後の鶴丸城城山の東に「おうち」（大路）の存在も確認できる^⑦。このように出水・谷山筋に相当するルートが部分的に確認できるため、諏方馬場と「おうち」を結ぶ部分の街道も存在した可能性が高い。天保図においてこのルートに該当し、中世の海岸線より高い所を通る街路は、正保国絵図の出水・谷山筋と一致する街路に限られる。さらにこの街道は、舌状台地①の地形に応じた曲線で、直線が卓越する他の街路（図1）とはパターンが異なるため、中世の街道の形を踏襲していると考えてよいだろう。

第三節 II 清水城期（一三八七年―一五五〇年）

清水城は精木川の谷の奥に立地し、戸柱の港からやや離れてい

る（図4）。新たな神社も同様の傾向で立地し、全体として島津氏関連の諸施設が精木川沿いの山際で増加している。

清水城の西に建立された曹洞宗福昌寺は島津氏の菩提寺であり、広大な境内を有した。この境内の四至は応永三年（一三九六）の「島津元久定書」^⑧で東は「と、ろきの田縁をくたり前河まで」、南は「池の上之後の小溝くたり」、西は「千手堂之上山のめんとをり内丸の田縁のほりさいはらまで」、北は「寺之後かなめか山の田縁くたり」と定められた。『三国名勝図会』^⑨では撻鞞々（タシタドウ）の谷が轟小路とも称されるため、東の「と、ろき」だとされる。天保屏風図には福昌寺と清水城の間の谷に「タシタドウ」とある。この谷の川が精木川に流れ込むため、「前河」は精木川のことだろう。南の「池の上」は地籍図に舌状台地②を示す小字として残る。従って「小溝」は、福昌寺からあるいは清水城から見て舌状台地②の後ろ、つまり二列の舌状台地の間の小河川だと言える。この小河川の上流では、応永三年（一三九六）には浄光明寺の北東麓に千手堂があったと推定され、さらに谷の奥には天保屏風図に「内之丸」とある。また内之丸の奥に催馬楽（さいばら）城という南北朝期の城があった^⑩。よってこの谷が境内の西を限っており、南を限る小河川に繋がっていたと考えられる。以上から福昌寺の境内は図4のように復原できる。北の境界は比

定できなかつたが、福昌寺の背後の丘陵を囲むように定められたのだろう。この境内は精木川に面しており、応永二年（一三九五）の「島津元久禁制」^①に福昌寺に関して「門前河不可爲殺生」とあることから、精木川が境内に含まれていたと言える。つまり福昌寺は川を介して戸柱の港と繋がっていたのである。

福昌寺は島津氏関連の交易品を扱っていたことが確認され、その中には絹織物や「唐物」等の対外交易を示唆する品が含まれる。^②中世の禅宗勢力は外交使節として対外交流に深く関わり、中でも曹洞宗は朝鮮や琉球との交流を担っていたとされる。^③福昌寺を核とする門派も周防や壱岐、対馬まで勢力を広げており、また一四世紀末には島津氏が琉球や朝鮮と通交・貿易を行っていたとされるため、^④福昌寺は島津氏の対外交易に深く関わっていたと考えられる。つまり清水城前半の島津氏は、福昌寺を介して戸柱の港を対外交易港として使用していたと推定できる。

一五世紀末からは滑川周辺に禅宗寺院が立地するようになる。長享二年（一四八八）に桂樹院島陰寺が滑川に近い高台に移ったとされ、永正五年（一五〇八）に興国寺も清水館の隣から滑川に近い山際に移動したという。当時は細川氏や大内氏が香料等の南海産物を求めて対琉球関係を重視していた。^⑤細川氏の琉球通交の一端を担っていた島津氏も、琉球交易への指向性を高め、実践的

外交知識として臨濟僧の桂庵玄樹を登用していた。^⑥桂樹院島陰寺は島津氏が桂庵玄樹のために建立したとされる。福昌寺末の興国寺は大内氏派遣の遣明船に関わった形跡がある。^⑦後の内城期には興国寺の僧がキリスト教宣教師と交流し、^⑧また当寺を琉球の使節が宿所にした。^⑨このように島津氏の対外関係への関与が窺われる禅宗寺院の移転は、島津氏が滑川周辺の港を対外交易港として使用し始めたことを意味しているのではないだろうか。^⑩

新たな港の立地を島津氏が求めた要因として自然地形の影響を挙げることができる。二章で述べた通り、近世初期には精木川による堆積で戸柱の港の使用が困難になりつつある様子が窺える。この堆積が清水城期から生じていたとすると、船を福昌寺まで引き入れることも難しくなっていたのではないだろうか。

第四節 Ⅲ 内城期（一五五〇年～一六〇一年）

清水城跡や福昌寺の周辺の寺社の立地は、大乘院の建立の他に大きな変化はない（図5）。一方で滑川周辺の港に近い山際に寺院が増加した。戸柱の港付近では諏方社六坊の西寿院が建立されたとされ、神社も立地した。このように戸柱の港と滑川周辺の港に近接して寺社が立地する傾向は清水城期と同様であり、二つの港がまだ機能していたと考えられる。精木川による堆積の影響は

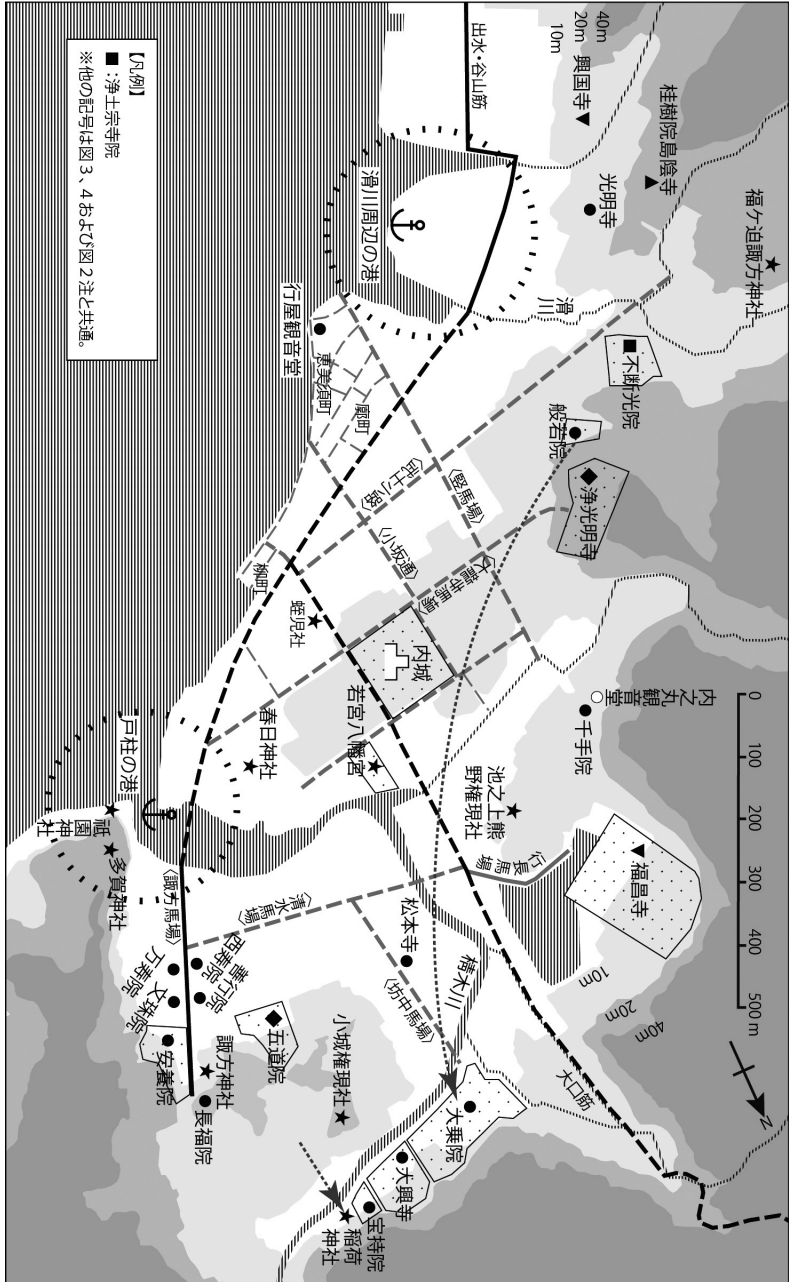


図5 内城期(1550-1601年)の景観

あったものの、戸柱の港は完全に使用できなくなっていたわけではないだろう。なお西寿院を建立する日秀上人が、行屋観音堂も建立したとされることに留意しておきたい。

他方で鳥津氏の拠点は立地傾向を大きく変える。内城は舌状台地①に位置し、清水城に比べて海岸に大幅に接近したと言える。

清水城期以前は舌状台地①に寺社の存在は推定されず、利用されていない空白地だったと考えられる。内城の敷地は発掘調査が不足しているため明らかではない。しかし慶長一六年（一六一一）に城跡に建立される大龍寺の敷地が築地堀に囲まれた方形区画だったことや、内城が「築地一重之屋敷」²³だったとされることから、近世の大龍寺を含む方形区画が内城の敷地を踏襲しているとされている。²³

内城の方形区画は、近世図では大龍寺馬場とその北の平行な道等の直線道に囲まれている。また武士小路、小坂通、豎馬場も内城の方向とほぼ一致する直線道であり、舌状台地①の上から南斜面上にかけて方形区画を形成している。他の守護所由来の戦国城下町でも城館の周囲に直線道と方形区画が敷かれた例は多いため、²⁴これらの直線道と方形区画も内城期のものと考えられる。

近世初期の大口筋も舌状台地①上は直線であり、内城の方形区画の東面に接している。しかし福昌寺が精木川まで境内に含んで

いたため、内城建設以前の大口筋は近世初期とは異なるルートだったと考えられる。福昌寺門前の行長馬場（図4）は清水城期には存在が確認でき、²⁵近世図では清水馬場を介して諏方馬場と繋がる。よって清水馬場の原形となる道も清水城期には存在したと考えられよう。つまり清水城期の大口筋として、諏方馬場で出水・谷山筋と分岐し、清水馬場、坊中馬場、清水館の西面を通るルートを想定できる。福昌寺は清水城期末の戦乱で「門前池之上」も含めて破壊され、²⁶天文九年（一五四〇）に相州家鳥津氏によって再興された。²⁷よって内城建設前に福昌寺の境内に多少の変化があったと考えられよう。そして内城建設に伴い、大口筋は内城の方形区画に合わせて図5のように変更された可能性が高い。

第五節 町場の形成

町は中世史料から内城期に存在したことが確認できる。『上井覚兼日記』に「下町」の火事の記録があり、また「祇園はやし例年のことく也」という記述からは祭礼を行う町共同体の存在が示唆される。²⁸なおこの祇園神社が戸柱の港に近接することに留意しておきたい。詳しい町の沿革は『倭文麻環』²⁹に伝わる。これによると恵美須町が最も古く清水城期から存在し、内城期に廓町と柳町が形成されたという。従って以下では図6において恵美須町

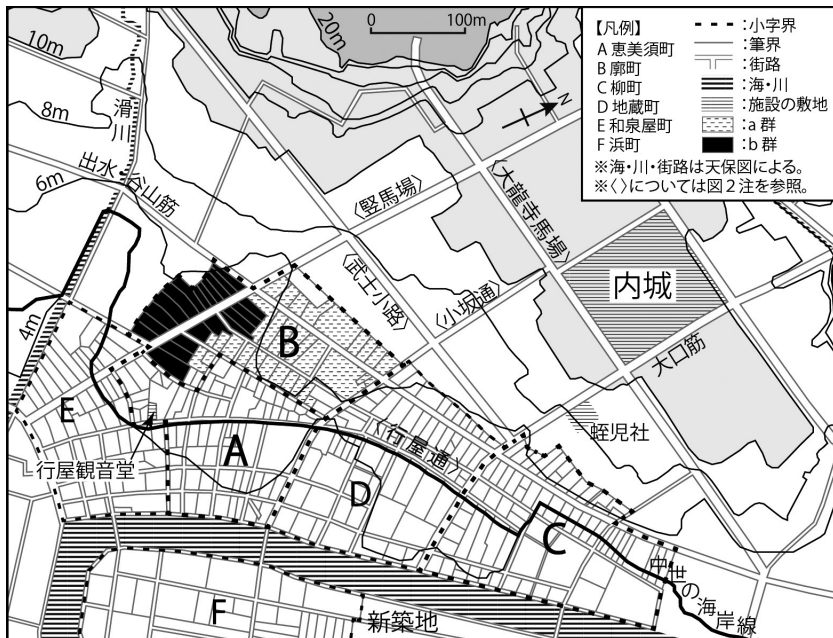


図6 地割・微地形から見た内城期城下町の形成

(A)、廓町(B)、柳町(C)に絞って分析する^⑩。

近世の街路は行屋通を境に明らかにパターンが異なるため、中世から陸地だった部分の地割は近世にも概ね踏襲されたと考えられる。よって天保図と街路形態がほぼ一致する地籍図も、中世の地割の傾向を残している可能性が高い。従って中世鹿児島島の景観復原にも地籍図の使用は有効だと考えられるため、以下では地籍図から内城期の城下町の地割を复原する。

恵美須町(A)の範囲は出水・谷山筋に面さず、また堅馬場に面するわずかな部分を除くと、直線道にも面さない。行屋通を海岸線とすると、恵美須町(A)の大部分が海岸線に面していたと言える。町の内部の地割は、廓町(B)と柳町(C)では短冊状地割が並ぶ一方で、恵美須町(A)は短冊状と言えない不整形なものが目立つ。このような形態から、恵美須町(A)は内城建設以前から海浜集落として存在していたと考えられる。

内城期に形成された柳町(C)は方形区画の縁辺に立地し、出水・谷山筋を軸としている。柳町(C)は、出水・谷山筋と海岸線が最も接近する所にあり、また軽児社の下の堤に形成されたことからも、海に接していた可能性が高い。

廓町(B)は方形区画と恵美須町(A)の間に位置する。

廓町（B）の短冊状地割は、出水・谷山筋とそれに平行な道に間口を向けるa群と豎馬場に間口を向けるb群に分類できる。a群は出水・谷山筋を軸とするため、街道集落として形成されたと推定できる。一方でb群は滑川河口の入江に接していた可能性が高く、海浜集落的な町だったと考えられる。ここで微地形に着目すると、舌状台地①は豎馬場の辺りでくびれて小規模な谷ができていることが分かる。しかし中世の海岸線は、このくびれに反して不自然に張り出し、b群が立地する平地を形成している。豎馬場はこのくびれを通り、b群の平地を貫いている。海岸線も本来はくびれに合わせて陸側に寄っていたと推定すると、内城期に豎馬場の延伸に伴って海浜が埋め立てられ、その上にb群が形成されたと言えるのではないだろうか。恵美須町（A）の豎馬場に接する部分も、この埋め立てに伴うものだろう。このようなb群の形成は、内城建設時に恵美須町（A）だけでは市町が狭いとして廓町（B）が「立て添へ」られたとされることも合致するように思える。さらに廓町（B）は、町名の由来が内城の「廓裡（クルハウチ）に係る」ことだとされることから、島津氏の城下町建設に伴う町だと分かる。つまり廓町（B）は恵美須町（A）や滑川河口と方形区画を結び付けるという重要な役割を果たしていたと言える。

町場が祇園神社の信仰圏だった上に、諏方社六坊に関わる行屋観音堂が恵美須町（A）に位置していたことから、既存の海浜集落である恵美須町（A）は戸柱の港に付属した港町だったと推定できる。島津氏は城下町を形成し、方形区画の縁辺にこのような海浜集落を結び付けることで、港を城下に取り込むことに成功したのではないだろうか。

- ① 新名一仁『室町期・島津氏領国の政治構造』戎光祥出版、二〇一五年、二八―三三頁を参考にした。
- ② 島津氏が東福寺城を出てから清水城に入るまでは、寺社・城館の立地に変化が見られないため、本稿では東福寺城期に含めた。島津氏が清水城に移った年は諸説あるが、ここでは便宜的に嘉慶元年とした。
- ③ 近世絵図地図資料研究会編『近世絵図地図資料集成 第二期・第一六卷正保国絵図集成・西日本篇』科学書院、二〇一二年、所収。
- ④ 鹿児島県教育委員会編『歴史の道調査報告書第一集 出水筋』一九九三年。同『歴史の道調査報告書第二集 大口筋・加久藤筋・日向筋』一九九四年。同『歴史の道調査報告書第四集 南薩地域の道筋』一九九六年。
- ⑤ 前掲①四四―四九頁。
- ⑥ 『島津氏久定書』（『旧前二』二〇〇）。
- ⑦ 『ひのかわ後家讓状』（『旧前二』二二九五）。
- ⑧ 『旧前二』五七四。
- ⑨ 前掲一章②c、第一卷、四三九―四四〇頁。
- ⑩ 鹿児島市教育委員会『鹿児島市文化財調査報告（6）鹿児島市中世城館跡』一九八九年、四六―四七頁。

- ⑪ 『旧前二』五三七。
- ⑫ 「島津元久置文」(『旧前二』五七九)。「島津元久書状」(『旧前二』六九二)。「なへくら久頼・長の玄林連署請文」(『旧前二』六九四)。「宗祇書状」(『旧前二』一七五四)。
- ⑬ 上田純一「曹洞宗禅僧の対外交流」中世史研究三二、一九九七年、六一頁。
- ⑭ 鈴木泰山「禅宗の地方発展」畝傍書房、一九四二年、二五八―二七九頁。
- ⑮ 関周一「唐物の流通と消費」国立歴史民俗博物館研究報告九二、二〇〇二年、九七―一〇二頁。
- ⑯ 伊藤幸司「大内氏の琉球・通交」中世史研究二八、二〇〇三年、一八七―二〇頁。同「十五・十六世紀の日本と琉球——研究史整理の視点から——」九州史学一四四、二〇〇六年、一―二四頁。
- ⑰ 伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館、二〇〇二年、一九九―二〇〇頁。
- ⑱ 「陶弘詮書状」(『旧前二』一九一四)。
- ⑲ 「フロイス日本史」(前掲一章⑩)二四七頁。
- ⑳ 『上井覚兼日記』天正三年(一五七五)三月二十九日(前掲一章⑳g、一〇五頁)。
- ㉑ 桂樹院島陰寺は、創建時に立地した海岸を田之浦とする説(西村天因『日本宋学史』梁江堂書店、一九〇九年、一八三―一八七頁)もあり、移転前から港を指向する立地傾向を持っていた可能性がある。
- ㉒ 『島津家伝記大概』(鹿兒島県立図書館蔵)。
- ㉓ 五味克夫「内城(大龍寺)跡について」(鹿兒島市教育委員会『大龍遺跡』(鹿兒島市埋蔵文化財発掘調査報告書一)一九七九年、五八―六七頁。東和幸「鹿兒島(鶴丸)城前後の城と町づくり」縄文の森から六、二〇一三年、二五―三〇頁。

- ㉔ 前掲一章②b。
- ㉕ 福昌寺の天祐宗津(一四六一―一五三三)が、永正五年(一五〇八)に奈良原助八という者が「福昌寺門前行長馬場」で自殺し、その地に六地藏塔が建てられたと記している(興国寺二世宗津叟疏「(旧前二)一八一四」。六地藏塔の石柱の一部は福昌寺跡の前の道に現存する。また天保図の行長馬場は、他の直線道とは異なり、舌状台地②の地形に応じた曲線であるため、中世の形を残していると言えよう)。
- ②⑥ 「樺山玄佐自記」(『旧前二』二二九二)。
- ②⑦ 「島津貴久袖判恕岳申状」(『旧前二』二二九三、二二九四)。
- ②⑧ 天正三年(一五七五)二月二日(前掲一章⑳g、一四〇頁、天正一二年(一五八四)六月一日(前掲一章⑳h、六七頁)。「下町」は恵美須町、廓町辺りに比定されている(鹿兒島市史編さん委員会『鹿兒島市Ⅰ』鹿兒島市、一九六九年、二六六―二六八頁)。
- ②⑨ 前掲二章④。
- ③① 図6では内城期の三町とは別の町もあるが、和泉屋町(E)と浜町(F)は中世の海岸線より海側にあり、地藏町(D)は町内の千地蔵堂が元和年中(一六一五―一二四)建立とされるため(『三国名勝図会』前掲一章⑳c第一卷、四二四頁)、近世の成立だと推定できる。
- ③② 前掲二章④。
- ③③ 前掲二章④。

第四章 中世鹿兒島における港と城下町

本稿で明らかになった鹿兒島の港と城下町の関係をまとめると

次のようになる。戸柱の港には東福寺城期から社寺勢力が存在していた。清水城期もこの既存勢力が戸柱の港周辺を占め、内城期にも残存した。一方で島津氏は清水城期から本格的に鹿児島を本拠とし、精木川沿いに城や寺社を配置したが、港に接近できてはいなかった。しかし内城期には島津氏は海に近づいて城下町を形成することで港を城下に取り込むことに成功したと言える。

北陸の事例と比較すると、鹿児島の場合、城下町が既存の海浜集落を基に形成されたことは、北陸の城下町が中世港町を基にしていたことと共通している。やはり城下町を成立させるためには、地域社会の中に存在した集落を取り込む必要があったのだろう。とは言え鹿児島の場合、既存の海浜集落は北陸の中世港町に比べて規模が小さく、むしろ島津氏の城下町形成によって町として拡大したと言える。

他方で島津氏は、禅宗寺院を介して対外交渉港を使用していた。対外交渉を担う福昌寺は清水城期に戸柱の港と直結していたものの、やはり完全に取り込むほどに港に接近できてはいなかった。一五世紀末、自然地形の影響で戸柱の港の使用が困難になると、島津氏は滑川周辺の港を新たに対外交渉港として整備した。ただしこの港の新設は城下町形成と連動するものではなかった。

本稿の復原範囲からは外れるが、内城期にも新たな港の存在を

推定できる。内城期の禅宗寺院の立地に着目すると、弘治二年（一五五六）に島津氏が菩提寺として福昌寺末の南林寺を建立したとされる^①。南林寺の位置は、鶴丸城建設以前は海の中にある小高い地形で、「海つら」の真砂に松が立つ地だったとい^②う。従って南林寺は甲突川河口の海に接する砂州に立地したと推定でき、近隣に船着場を有した可能性が高い。さらに南林寺の「長老」はキリスト教宣教師と交流し、当寺に寝泊まりさせていた^⑤。また南林寺の近隣には、帰化明人が住んでいた伝承や朝鮮出兵から連れ帰った朝鮮人が居住した伝承が残る。これらのことから内城期には南林寺の周辺が新たな対外交渉港として整備されていた可能性が高い。甲突川は精木川や滑川より明らかに大きい河川であり、より船を着けやすかったのだろう。

このように島津氏は対外交渉に適した地形条件を求めて新たな港を配置していたと考えられる。しかし内城期に福昌寺や興国寺が残存していたことから、主要な対外交渉港は他に移ったとは言え、既存の港も依然として使用されていたのだろう。つまり島津氏は、禅宗寺院のネットワークを介して複数の港を間接的に統括していたと考えられる。そして内城期にその一部の港を城下に取り込んだのではないだろうか。内城期の恵美須町は元は魚市を成し、後には武具も売ようになったとされ、「諸所の浦々々

り店卸の賣物を運漕」したという。^⑧ また柳町も魚屋が並び、「小魚屋」（コナヤ）という所があったとされる。^⑨ こうした内城期の町が城下の武家の生活を支える役割を果たしていたことを示唆する記述から、それぞれの港は禪宗寺院を介したネットワークの中で緩やかに機能が分かれていた可能性も否定できない。

本稿では鹿兒島における港と戦国城下町の景観の特徴を明らかにしたが、禪宗ネットワークによる港の使用や、島津氏による町の形成・支配、島津氏と禪宗の関係といったことの具体的な実態まで十分に考察することはできなかった。対外関係史における禪宗や武家権力に関する研究の今後の進展に注視する必要がある。また、本稿のような景観復原による事例を蓄積し、比較することとそれぞれの地域における港と城下町の関係を浮き彫りにすることができよう。今後の課題としたい。

- ① 建立時期は『三国名勝図会』（前掲一章^②c、第一卷）三四七―三四九頁、位置は近世図による。
- ② 『薩藩天保度以後財政改革顛末書』（本庄栄治郎編纂代表『近世社会経済叢書 第四卷』改造社、一九二六年）一〇〇―一〇一頁。文政末から嘉永年間の財政改革に関して、改革に関わった海老原雍齋が明治一七年（一八八四）に著したものであり、治水に関わる記述に、著者が聞いた中世の甲突川の様子が記されている。

- ③ 「箕輪伊賀覚書」（『旧後二』五九四）。
- ④ 鶴丸城建設以前の甲突川の河口は近世城下町における俊寛堀の位置だったが、中世にも近世の流路に水が流れており、近世の流路と俊寛堀の間には「葭洲原」もあったとされる（前掲^②）。従って中世の甲突川は俊寛堀と近世の流路の間を分岐しながら乱流し、中州や砂州を形成していたと推定できる。

- ⑤ 「フロイス日本史」（前掲一章^⑩）二四四頁。
- ⑥ 増田勝機『薩摩にいた明国人』高城書房、一九九九年、六一頁。
- ⑦ 「由来記」（a宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第十卷 農産漁民生活』三一書房、一九七九年）六七―六七七頁。「由来記」は戦国期からの高麗人渡来、薩摩焼の沿革等を文政六年（一八二三）にまとめたものである。高麗人が居住した苗代川村と藩役人の両方が作成に関わっており、客観性が高いとされる（原口虎雄「由来記 所役日記 解題」（前掲a）六七三―六七四頁）。
- ⑧ 前掲二章^④。
- ⑨ 前掲二章^④。天保屏風図では柳町の範囲に「上ナヤ」と記載がある。

〔付記〕

本稿は二〇一六年度に京都大学総合人間学部に出した卒業論文を加筆修正したものである。作成には指導教員の山村亜希先生にご指導頂きました。また京都大学大学院人間・環境学研究科地域空間論分野の小方登先生、小島泰雄先生にもご意見賜りました。記して感謝申し上げます。また本稿の骨子は二〇一七年度人文地理学会大会（於明治大学）において発表した。

（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程）

The Location of Medieval Ports in Kagoshima Castle Town

by

MIYOSHI Yukitaka

Studies of medieval castle towns have been conducted in various disciplines. These viewed castle towns as being constituted of many elements such as castles, shrines, and temples, and noted that the spatial structure of castle towns differed depending on the region in which they were located. Historical geographers have pointed out that the diversity was influenced by the existing spatial structures, for example landforms, highways and the distribution of elements of the infrastructure. Along those lines, scholars have now begun to pay attention to existing ports. There have been several interdisciplinary studies of the relationship between ports and castle towns in the Hokuriku region, which faces the Sea of Japan. However, the results of these studies cannot be generalized because they are peculiar to the Hokuriku region.

This paper therefore aims to show the process of the transformation of the relationship between ports and castle towns in Kagoshima, which faces the East China Sea. The Shimazu served as powerful provincial constables in Kagoshima throughout medieval times, and documents show that medieval ports existed in Kagoshima during the period. Moreover, Kagoshima can provide evidence of a new type of the relationship between foreign-trade ports and castle towns because the Shimazu were involved in the trade with the Ming Dynasty, Ryūkyū and Europe. This paper first estimates the coastline in medieval times and the location of ports. Next, the paper analyzes the distribution of institutions and facilities such as temples, shrines, highways and roads in three periods: the Tōfukuji-castle period (1341-1387), the Shimizu-castle period (1387-1550), and the Uchi-castle period (1550-1601). The section devoted to the Uchi-castle period shows in particular the developmental process of certain residential areas by focusing on the direction and pattern of roads and allotments.

The findings of this paper are summarized as follows. It turns out that there were two medieval ports: Tobashira port and another port at the mouth of the Nameri river. The former continued to develop throughout

medieval times because many temples and shrines were located near the port in every period. In the Tōfukuji-castle period, the Shimazu were based in the castle by the port, but they seem to have used it only temporarily as a military port. The Shimazu distributed their facilities far from the port during the Shimizu-castle period. However, in the Uchi-castle period, the castle of the Shimazu was moved nearer the coast, and they built residential areas between the castle and the existing port town. It can be said that the Shimazu managed to incorporate the port within their castle town. In the case of the Hokuriku region, warriors built their castles near existing port towns, as was the case in Kagoshima, but medieval port towns in the Hokuriku region were much larger than those in Kagoshima.

The foreign-trade port of the Shimazu was situated without regard to the transformation process of the castle town. In the Shimizu-castle period, the Zen temple Fukushōji, which was involved in the foreign trading of the Shimazu, was linked to Tobashira port through the Abeki river, although it was also quite distant from the port. This fact indicates that the Shimazu used Tobashira port through Fukushōji. However, by the end of the 15th century, other Zen temples such as Kejuin-Tōinji and Kōkokuji were located near the port at the mouth of Nameri river. Therefore, the Shimazu seem to have established a new foreign-trade port there. The reason for this relocation is that sedimentation made it difficult to use Tobashira port. In the Uchi-castle period, the Shimazu built Nanrinji, another Zen temple, and probably moved their port again to the mouth of the Kōtsuki river, which was larger than both the Abeki and Nameri rivers. However, the existing ports probably continued to operate even though they were not used for foreign trade because most Zen temples remained in place. In other words, the Shimazu seem to have selected the topographical condition that made it easier for ships to operate in their foreign-trade port, controlling some ports indirectly through the network of Zen temples.